

アメリカにおける話すことの教育の実態と考察

— 中学校の観察記録より —

奥田久子

I はじめに

他の国の人々に比べて、日本人は概して話しべたであるといわれる。残念ながら、そうに違いないと思わざるを得ない実例が多い。しかし、世界がますます小さくなって、国際社会の一員としてごしていかななくてはならなくなった現在、話しべたを嘆いてばかりはいられない。

「近代国語教育年表—大正編—」によれば、大正時代にも数は少ないが、話すことに関する文献が書かれている。戦後の学習指導要領では、話すことの教育が重要視されている。それにもかゝらず、話すことの教育が、わずかな例を除いて成果をあげていないのは、どうしてであろうか。理由はいくつか考えられる。

(1) 第一に考えられるのが、入学試験とのかかわりあいである。高校、特に大学の入学試験に出題されないうために、話すことの教育はなおざりにされ、教室は知識中心の場になってしまふ。

(2) 話すことの重要性が認識されず、話すことの学習に関心を示さない教師や生徒が多い。

(3) 話すことの学習の成果は、なかなか目に見えにくいものである。せっかく時間をさいて取り組んでも、体系的な学習にまで発展する前に、あきらめてしまうこともある。

(4) 教師の指導能力に問題がある場合もある。国語を担当する教師の中で、話すことの体系的な指導方法を学んできた者がどれだけいるであらうか。

(5) 指導や自己発展の上で教師の助けとなる文献やその他の資料が少ない。読むことの教育に較べると著しい。

(6) クラスの生徒数や、教師の負担にも問題がある。話すことの学習では、限られた生徒だけでなく、クラス全員が人前で話す体験を多く持つことが大切である。小クラスでは、教師の目も生徒の一人一人によく行き届き、なかなか雰囲気の中で、楽しく学習することができよう。

(7) 話すことの技術は、教室だけで身につくものではない。学習したことが、広く生活の場で見がかれてこそ、自分のものになっていくものである。ところが、それとは逆に、学習したことを否定してしまうような雰囲気が生生活の場で感じられる。

上の(7)のことについて次に少し述べてみたい。

日本には、赤子をあやすのに、「恥ずかしい恥ずかしい」という表現がある。赤ん坊が首をひっこめると「いないいないバー」をするのと同じ気軽さで「恥ずかしい恥ずかしい」とあやしかける。こうして必要以上な羞恥心が、子供心に無意識の内に教えこまれていくようである。物心が付くと、成長の過程では「おとなしい」という言い方で人の性格が好意的に評され、「沈黙は美德なり」という考えが、大人になっても人の言動を左右する。この点、アメリカの場合とはとも異なる。「いないいないバー」に相当する表現に「ピカプー」(peekaboo)があるが、「恥ずかしい恥ずかしい」に相当するあやしことばはない。足掛け10年のアメリカ滞在中に、それらしい表現を一度も耳にしたことはないし、実際アメリカ人に聞いても知らないという。また「沈黙は美德」ではなく、無口だったり、消極的で自己の考えを表明しない者は、男女を問わず、知性の無い、内容を持たない人間として軽蔑される。またアメリカでは、積極性の他に、話し方が性格判断の際に問題にされる。なにげなく人の性格を批評しているとき、「He is soft-spoken.」という表現がしばしば人の口にもぼる。相手の話しによく耳をかたむけ、人の心をやさしくゆさぶるように話す人のことである。人々は普段、

話すことを積極的に楽しみ、討論会や授業時間でも、質疑応答や意見の交換が実に盛んである。実際そうした雰囲気の中にいると、黙っていることは恥ずかしいことだという気持ちになり、積極的に話し合いに参加するようになる。確かに、生活感情とか、生活環境が、話すことの活動に大きな影響を与えるようである。しかしそうしたことの分折はまたの機会に譲るとして、ここでは、アメリカの話すことの教育の実態に焦点をしばってみたい。

私は、昭和44年9月から3カ月にわたって、米国、オハイオ州にあるヘースティング中学校の授業を観察した。その時の記録の一部から、アメリカの1中学校では、話すことの教育がどのように行なわれているかを、紹介し検討してみることにする。

II 時間割りおよび座席配置

日本の話すこと・聞くことの授業にあたるスピーチという授業は中1、中2で必須科目になっていて、中3で選択となる。私がおもに観察したスピーチは、ハンサー先生とタッカー先生の担当であった。中学2年のスピーチは、ハンサー先生が3コマ、タッカー先生が2コマの割合で時間が組まれているので、生徒は学期初めに、これから5コマの内から、最も都合のよい時間にスピーチの授業を取るように決めることができる。下記の時間割りを参考にされたい。

Mrs. Hanser の時間割り (教室221号室) 担当科目 2年スピーチ (スピーチ 8) 3年国語 (国語 1)

1	2	3	4	5	6	7	8	9
8:38	9:24	10:10	10:56	11:43	12:30	1:17	2:02	2:48
スピーチ 8 (1学期) 火木金 (2学期) 月火木	自習監督 水～金	国語 1 月～金	スピーチ 8 (1) 火木金 (2) 火～木	図書室監督 月～金	昼食	国語 1 月～金	国語 1 月～金	スピーチ 8 (1) 火～木 (2) 火～木

Miss Tucker の時間割り (実験室) 担当科目 2年3年スピーチ

スピーチ 8 (1) 火水金 (2) 月水金	スピーチ 1 月～金	スピーチ 1 月～金	スピーチ 1 月～金	昼食	自習監督 月～金	スピーチ 1 月～金	スピーチ 8 (1) 月火木 (2) 月火木	会議
------------------------------	---------------	---------------	---------------	----	-------------	---------------	------------------------------	----

<表 1>

表 1 の時間割りを、わかりやすく書き換えると表 2～表 5 のようになる。

ハンサー先生 1 学期目の時間割り表							
時間	曜日	月	火	水	木	金	
午前	1	8:38	/	スピーチ8 (2年生)	/	スピーチ8	スピーチ8
	2	9:24	/	/	自習監督	自習監督	自習監督
	3	10:10	国語Ⅰ (3年生)	国語Ⅰ	国語Ⅰ	国語Ⅰ	国語Ⅰ
	4	10:56	/	スピーチ8	/	スピーチ8	スピーチ8
	5	11:43	図書室監督	図書室監督	図書室監督	図書室監督	図書室監督
午後	6	12:30	昼食	昼食	昼食	昼食	昼食
	7	1:17	国語Ⅰ	国語Ⅰ	国語Ⅰ	国語Ⅰ	国語Ⅰ
	8	2:02	国語Ⅰ	国語Ⅰ	国語Ⅰ	国語Ⅰ	国語Ⅰ
	9	2:48	/	スピーチ8	スピーチ8	スピーチ8	/

<表 2>

ハンサー先生 2 学期目の時間割り表							
時間	曜日	月	火	水	木	金	
午前	1	8:38	スピーチ8	スピーチ8	/	スピーチ8	/
	2	9:24	/	/	自習監督	自習監督	自習監督
	3	10:10	国語Ⅰ	国語Ⅰ	国語Ⅰ	国語Ⅰ	国語Ⅰ
	4	10:56	/	スピーチ8	スピーチ8	スピーチ8	/
	5	11:43	図書室監督	図書室監督	図書室監督	図書室監督	図書室監督
午後	6	12:30	昼食	昼食	昼食	昼食	昼食
	7	1:17	国語Ⅰ	国語Ⅰ	国語Ⅰ	国語Ⅰ	国語Ⅰ
	8	2:02	国語Ⅰ	国語Ⅰ	国語Ⅰ	国語Ⅰ	国語Ⅰ
	9	2:48	/	スピーチ8	スピーチ8	スピーチ8	/

<表 3>

タッカー先生 1 学期目の時間割り表							
時間	曜日	月	火	水	木	金	
午前	1	8:38	/	スピーチ8 (2年生)	スピーチ8	/	スピーチ8
	2	9:24	スピーチⅠ (3年生)	スピーチⅠ	スピーチⅠ	スピーチⅠ	スピーチⅠ
	3	10:10	スピーチⅠ	スピーチⅠ	スピーチⅠ	スピーチⅠ	スピーチⅠ
	4	10:56	スピーチⅠ	スピーチⅠ	スピーチⅠ	スピーチⅠ	スピーチⅠ
	5	11:43	昼食	昼食	昼食	昼食	昼食
午後	6	12:30	自習監督	自習監督	自習監督	自習監督	自習監督
	7	1:17	スピーチⅠ	スピーチⅠ	スピーチⅠ	スピーチⅠ	スピーチⅠ
	8	2:02	スピーチ8	スピーチ8	/	スピーチ8	/
後	9	2:48	会議	会議	会議	会議	会議

<表 4>

タッカー先生 2 学期目の時間割り表							
曜日	時間	月	火	水	木	金	
午前	1	8:38	スピーチ8	/	スピーチ8	/	スピーチ8
	2	9:24	スピーチⅠ	スピーチⅠ	スピーチⅠ	スピーチⅠ	スピーチⅠ
	3	10:10	スピーチⅠ	スピーチⅠ	スピーチⅠ	スピーチⅠ	スピーチⅠ
	4	10:56	スピーチⅠ	スピーチⅠ	スピーチⅠ	スピーチⅠ	スピーチⅠ
	5	11:43	昼食	昼食	昼食	昼食	昼食
午後	6	12:30	自習監督	自習監督	自習監督	自習監督	自習監督
	7	1:17	スピーチⅠ	スピーチⅠ	スピーチⅠ	スピーチⅠ	スピーチⅠ
	8	2:02	スピーチ8	スピーチ8	/	スピーチ8	/
後	9	2:48	会議	会議	会議	会議	会議

<表 5>

ハンサー先生の4時限目の授業を取ることにしたジェロルド少年の時間割りを表4に示すが、スピーチは1学期に火木金と週3日履修している。

生徒の時間割り1例

ヘースティング中学校 ロバート・ルイス校長 Tel. 451-8310		生	徒	名	姓	番	号	学年	ホームルーム	学年度	電 話 番 号				
		ジェ	ロ	ル	ド	・	レイ	ナル	ズ	男	771555	8	812	44-45	457-0284
コース	科目	時間	教室番号	学期	曜	日	単位	担	当	教	師				
000	習	01	232	1	月	木	・00								
000	習	01	232	2	月	水	・00								
884	習	01	232	3	月	水	・00								
205	習	02	0103	3	月	火	・00								
884	習	02	0103	3	月	水	・00								
011	習	03	0205	3	月	火	・00								
000	習	04	217	1	月	水	・00								
050	習	04	0221	1	月	木	・00								
000	習	04	232	2	月	火	・00								
006	習	04	0206	2	月	水	・00								
999	習	05	217	3	月	火	・00								
000	習	06	217	1	月	水	・00								
885	習	06		3	月	水	・00								
809	習	07		3	月	水	・00								
000	習	07	217	1	月	火	・00								
000	習	07	217	1	月	水	・00								
585	習	07		3	月	水	・00								
809	習	07		3	月	水	・00								
109	習	08	0202	3	月	木	・00								
305	習	09	0212	3	月	金	・00								

＜表 6＞

この時間割りから、曜日と科目だけを取り出して、わかりやすく書き改めると表7、表8のようになる。

曜日 時間	学 期				
	1	2	3	4	5
1 8.38	自習	体育	自習	体育	昼食
2 9.24	地学	体育	地学	地学	昼食
3 10.10	国語	国語	国語	国語	昼食
4 10.56	自習	スピーチ	自習	スピーチ	スピーチ
5 11.43	昼食	昼食	昼食	昼食	昼食
6 12.30	音楽	自習	工芸	工芸	工芸
7 1.17	自習	自習	工芸	音楽	工芸
8 2.02	アメリカ史	アメリカ史	アメリカ史	アメリカ史	アメリカ史
9 2.48	数学8	数学8	数学8	数学8	数学8

<表 7>

曜日 時間	学 期				
	1	2	3	4	5
1 8:38	自習	体育	自習	体育	昼食
2 9:24	地学	体育	地学	地学	昼食
3 10:10	国語	国語	国語	国語	昼食
4 10:56	自習	スピーチ	スピーチ	スピーチ	スピーチ
5 11:43	昼食	昼食	昼食	昼食	昼食
6 12:30	音楽	自習	工芸	工芸	工芸
7 1:17	自習	自習	工芸	音楽	工芸
8 2:02	アメリカ史	アメリカ史	アメリカ史	アメリカ史	アメリカ史
9 2:48	アメリカ史	アメリカ史	アメリカ史	アメリカ史	アメリカ史

<表 8>

彼のクラスの座席配置は表9に示したように、1クラス22名である。この学校では、1クラスの生徒数の上限は25名であるが、実際には多くて23名であり、書くことの創造教育を行なっているクラス

では1クラス10名であった。新興住宅地が近くにある関係で、年々生徒の教が増えていくが、それにつれてクラスの数を増やし、クラス数はそのまま生徒を詰め込むこととはしない。

座 席 配 置 図

掲 示 板	黒	座	席	配	置	図	板	掲 示 板
ケビン・クレイン (男)		トム・ミンズ (男)		デビッド・ロバーツ (男)		ジム・トラフ (男)		
ラリー・ペンスキー (男)	レジー・ヘイガー (女)	ホフ・マコーター (男)		ジェロルド・レイノルズ (男)		ポール・ストレイビグ (男)		スコット・ブル (男)
ステイブ・ベーン (男)	ジョリー・ギルゼフ (女)	キム・マガイキー (女)		ラリー・ハイク (男)		セジキ・スノナカ (男)		マーク・シンダグレン (男)
ジョン・アンダーソン (女)	ジョー・フナリー (男)	シンディ・クーン (女)		ダグ・オハラ (男)		ロンダ・ロジャーズ (女)		シェーン・ホー (男)
座席数 24				教 卓				
生徒数 22名								

<表 9>

Ⅲ カリキュラムおよび教材

この学校では、学校独自のカリキュラムを使用している。「スピーチ」というテキストは、最近までスピーチを担当していたロン・フアドリー教師が選択科目のスピーチのカリキュラムとして準備、編さんしたものである。中2では、主に教師が指導上の参考資料としてこれを用い、中3では、生徒に1冊ずつ与え、教科書兼参考書として使用している。このテキストの構成は表10のようである。

同中学校田中作製

Ron Fadley著 『スピーチ1』 プリント99ページ

発行年月日なし

1章	ドラマ	2章	情報	3章	実演
4章	説得	5章	討議討論	6章	話し合い
7章	朗読劇場、口頭解釈演技				

〈表 10〉

これらの章の詳しい紹介、検討は紙面の関係で次の機会に譲りたい。

Ⅳ 目的・目標

この教科の目標・目的を、上記の「スピーチ」のまえがきから紹介し、検討してみることにする。このまえがきの構成は、1「スピーチとあなた」2「スピーチと民主主義」3「スピーチと文化」の3項目から成っている。1の「スピーチとあなた」の内容は次の

とおりである。

1. スピーチとあなた

「この科目の目的が、あなたの人生と、どんなにかかわりあいがあるか考えてみたい。スピーチクラスというのは、私達一人一人に、ユニークな経験をさずけてくれるものである。この科目をかりに、スピーチと呼んでいるが、実は人間について学ぶ科目といったほうが適している。スピーチは、人と人との結びつきとか、他の人々とコミュニケーションできるかどうかが問題なのである。あなたがたの考えや、人柄を個人またはグループの人々に、どのように通して、人の性格や人柄を知ることができる。あなたがたの人生にとって、コミュニケーションは、重要な役割をはたすのである。これまでの研究でもわかるように、スピーチを通して、人間関係をうまく保っているかどうかということが、人の一生を幸せにも、不幸にもする。将来、医師、化学者、技術者等になる者は、選択した職業に必要な技術をのばしていく。そしてある者は、仕事仲間や、専門外の人々や上司と意志の疎通ができないために、仕事に失敗する。カーネギー研究財団の研究によると、専門的な知識がすぐれていて成功した者は、わずか15%で、85%は、人格的な面がすぐれているため、成功したという結果がでている。」

この内容からもわかるように、人間関係の重要性に立脚して、スピーチに対する関心を呼びさませようとしている。社会人、職業人としての成功、不成功は、専門的な技術よりも、むしろ人柄、人格にかかっているといっている。カーネギー研究財団の研究結果では、

人間関係を保つ上で重要な役割を果たす人柄は、スピーチを通して推し測られることを物語っている。スピーチ、人柄、人間関係、この三者の相互関係を極端にとらえている感がないでもないが、確かに、私達は、ある人物について知ろうとすると、その人の言動を思い起こすものである。こうした観点から、コミュニケーションの重要性が説かれ、さらにこのことを、生活の場での経験と結びつけて、認識させようとしている。スピーチの科目を単にスピーチの技術の習得にとどめないで、生活と関連づけて、血の通った学習にしようという意図がうかがわれる。

第二の「スピーチと民主主義」の内容は次の通りである。

2. スピーチと民主主義

「民主主義の原則を学ぶ上で、スピーチはどのような役割を、果たしているであろうか。民主主義にのつとめたスピーチクラスこそ、よい授業といえる。教師を前にして、生徒がノートをとるといった伝統的な方法は見られない。スピーチクラスは、実験の場なのである。グループに分かれて、学習することが多い、劇の準備をしたり、仲間と討論したり、論争したり、時には、ラジオ番組を書きおろすこともある。

ドラマの単元を例にとってみよう。仲間の中から監督を一人選ぶ、俳優になった者は、せりふの暗記や衣装に責任を持つ、決断を要することが、たくさんでてくるが、すべて、グループで話し合って決めていく。これが、チームワークであり、民主主義である。監督が横暴であったり、ある俳優がいばりちらして協力しなかつたりといった、非民主主義的な行動を見る機会もある。非民主主義的な人間が、グループにどのような影響を与えるか、判断

することができるであろう。民主主義的な行動を通してスピーチの重要さが、あなたがたに、はっきり、わかってくるはずである。」

ここで言おうとしていることは、スピーチ教室は、講義の場ではなくて、仲間が協力し合って、目ざすものを生み出していく実験の場なのであり、こうした実験の場を通してこそ、民主主義は根をおろし、講義中心や教科書絶対主義では得がたい、物ごとを正しく見きわめ、批判し、自から創造していく力が養なわれていくこととである。ごく最近のニクソンアメリカ前大統領の辞任に見る、アメリカ国民の民主主義の底力も、こうしたふだんからの体験を通して教育によって生まれ育てられていくのだと考える。

第三の「スピーチと文化」の内容を次に紹介する。

3. スピーチと文化

「文化ということばは、あなたがたにとって、否定的な響きを持つているようだ。確かに、スポーツということばに対すると同じようには、反応しない。文化というと、イタリア歌劇や、バレエダンスを連想する。これは、文化に対する理解や、認識が充分でないことを物語っている。スポーツや趣味と比べて、ブロードウェイの劇や、ミュージカルについて、どれだけ知っているか、考えてみるとわかる。この科目では、演劇も学ぶが、演劇の単元は生徒の間で大変人気がある。すぐれたコメディや劇を見る機会もあるし、俳優や監督になって自己を表現し、劇的なしぐさで立ち回ることができるからである。こうした経験をきっかけに、演劇に対する理解を深めてほしい。」

ここでは、スピーチの学習のめざすものが、単なる言語技術の習

得ではなく、よき社会人、職業人の育成であることを暗示している。スピーチはその人の人格、人柄の現われであるとするなら、文化は豊かな教養と人間性を身につける上で、欠かすことのできない源であると考えられる。

V 授業計画・授業過程

生徒の時間割の1例のところで紹介した、ジェロルド少年の出席している、ハンサー先生の授業から、1部を取り上げてみることにする。1学期、約18週間の間にも扱った単元は表11に示すように大きく6つに類別して予定を立てていた。

1 学期 (約 18 週間) の計画	
(1)	情報スピーチ (各生徒2〜3分)
(2)	実演スピーチ (3〜5分)
(3)	説得スピーチ (3〜5分)
(4)	口答解題演技 (2〜6分)
(5)	学期末試験 (5〜7分) (1)〜(3)の内から各自選び皆の前でスピーチ
(6)	その他 (討論、即興スピーチ、即興劇、ドラマ)

〈表 11〉

私が初めて、このクラスを訪れた9月25日には、すでに情報スピーチの単元にはいって情報スピーチの準備や、発表の仕方についての学習は、すでに終わっていた。当日は、なっさくスピーチ

に入り、7人の生徒が発表した。

授業の進め方としては、発表者は、自分の番が来たら、あらかじめ用意してきたアウトラインを、まず、先生に提出し、教卓に立って、時計係りの合図でスピーチを始める。時計係りが時々カードで時間を知らせる。スピーチが終わると、そのつど、生徒同志で、批評や意見や質問を出し合う。教師はこの間に、評価表に批評を書き込んでいく。この評価表は、その日の発表が全部すんでから教室のかたすみで行なわれる個人懇談のさい、批評が加えられたアウトラインと共に生徒に渡される。25・26両日に発表した13人のスピーチの題目は、表12の通りであった。

生徒のスピーチ題目	
生徒名	題 目
ロビン	キヤンプファイター
ジョー	虎馬乗り
デビッド	狩 狼
ジョー	ナイアガラの滝
ボブ	ホームラン王
スティーブ	スケート
トム	ゴルフ
ジョーン	サッカ―
ジョー	小型飛行船
ジョー	フットボール
ボブ	ロンボンの見物
キム	旅行

〈表 12〉

スピーチの1例

ジュリー・ギルモアのスピーチ (昭和44年9月25日)

キャンデー

キューカード (5"×7") 2枚より

キャンデー

ハンサー先生、おはようございます。甘党の皆さんおはようございます。アメリカ人は、一人平均、年に44キロのキャンデーを食べるということを知っていますか。アメリカ合衆国は、世界一のキャンデー生産国で年間4億ドルのキャンデーを生産しています。

I 歴史

- A 密をまぶした果実、木の実
- B キャンデーの元祖、エジプト人 紀元前二千年の墓石の絵
- C 一般向けのキャンデー、薬の上塗
- D 簡単なキャンデー製作所—1500年中期
- E オランダ人による最初のキャンデー北アメリカ1600—式祭の時の特別なキャンデー
- F わが国の開拓者かえでの砂糖でキャンデー
- G 売店の最初のキャンデー

石あめ、色つき砂糖あめ、ロリポップンひし形あめ

II 栄養価

- A 主成物—炭水化物
- B クイックエナジー (速効エネルギー)
- C ハイカー、運動家、競技前使用
- D 食後食べるべき (さらにカロリーをとるため)
- E ビタミン含有 (牛乳、木の实)

さて、以上のことから、キャンデーは、お腹をふくらますためのものというより、もっと複雑であるということが、おわかりでしょうか。

これらの題を見ると、中学生にしては思考性に欠け、やさし過ぎるのではないかと感じるを抱かないでもない。しかし、ここであらためて思い起こして見たいのは、上の(IV)で検討した日常生活の会話の重要性である。観念的になって宙に浮いたスピーチにならないよう、経験を通して消化した自分のことばで自己表現ができるように

することに重きがおかれていることがうかがえる。従って、題は教師が与えるのではなく、生徒自から、考え、決めるのである。次にジュリーのスピーチの内容を見ることにする。次に掲げるのは、クラスの前に出て話しをする時に持って出る、話し要点を書いたキューカードの全文である。

VI 評 価

1人の発表が終わるごとに、クラスで相互批評が行なわれた。

ジュリーの発表の後で、クラスの仲間から出た意見は、表情とか態度、話し の速度に 関する こと の 外に、話し の 内容 とか、その 進め方 におよんで いた。この 単元 の 目的 は、情報 を 口頭 で 与える こと なの で、仲 間 の 心 び を きな がら、わ か り や す く 話 せる よう に 内容 の 構成 を 考 え た 上 で、家 で 前 も っ て 練習 し て き て いる。練習 の 方法 と し て は、ま ず 鏡 に 向 か っ て 話し、次 に 家 族 の 人 達 に 聞 い て も ら っ て いる が、さ ら に クラ ス で 仲 間 や 先 生 の 意 見 や 批評 を 仰 ぐ こと に よ っ て、話 す こと の 力 が み が か れ て い く の で あ る が、こ の よう に 発表 者 に と っ て、生徒 中心 の 評価 方法 は たい へん た め に な っ て いる よう で あ っ た。な お、成 長 す る の は、発表 者 に と ど ま ら な い。批評 や 意 見 を 言 っ た り す る た め に は、内容 の 展 開 に 添 っ て、発表 者 の 意 図 を よ く 聞き 取 ら な け れ ば な ら な い。聞 く こと の 教育 も、同 時 に 行 な わ れ て いる の で あ る。批評 や 意 見 を 述 べ る こと に よ っ て 物 事 を 正 し く 見 た り、考 え た り、判断 す る 力 が 養 わ れ、自 己 の 考 え が 確 立 さ れ て い く。こ う し て 仲 間 同 志 で お 互 い に 高 め 合 っ て い く 過程 は、教師 中心 の 授業 で は 得 が た い 貴 重 な 経験 だ と 考 え ら れ る。こ の よう に、批評 は ま ず 仲 間 同 志 で 行 な わ れ、その 日 の 発表 が 全 部 す ん で か ら 行 な わ れ る 個人 懇 談 な ど で、さ ら に 批評 の ま と め を す る と い う 方法 が と ら れ て いた。個人 懇 談 は、教室 の 片 す み で 行 な わ れ 教師 に よ っ て 批評 が 書き 加 え ら れ た アウ ト ラ イ ン と 評価 表 が 生徒 に 渡 さ れ た。この 懇

談によつて教師と生徒の交流が緊密になり、生徒のはげみになつて いたようだ。プリント教材、アウトライン、評価表、キューカード などは、すべて、各自バインダーにためていって、学期末に先生に 提出する。このバインダーは、生徒それぞれの成長の過程を物語る ものであるから、学年成績をつけるさいに参考にするとのことであ った。

次の表は、教師によるジュリーのスピーチの評価表であるが「導 入」「内容」「むすび」「一般的なコメント」に分けて、批評が書 かれて いる。一般的なコメントの3にジェスチャーという項目があ る。ジェスチャーはアメリカの話すことの教育では、とても重要な こととしてとり扱われている。このことは、カリキュラムの第1 章にくわしいので、次の機会に紹介してみたいと思う。下記の評価 表は、あらかじめプリントしてあつて生徒が発表している間に右は しに手短かに批評を書くようになって いる。こうした評価方法をと れば、教師の負担になることなく、生徒との心の交流を保ちながら、 生徒1人1人の評価を毎時間でも行なうことが可能である。

教師による評価表

生徒名 ジュリー・ギルモア

導 入

- | | |
|--------------------------------------|-------------------|
| A. あいさつ (独創的であったか) | <u>よ</u> <u>い</u> |
| B. でだし (聴衆の聞く気をかりたてたか) | <u>実にすばらしい</u> |
| C. 特別な目的 (はっきり、しかも、めだたないように、のべてあったか) | <u>大変よい</u> |

内 容

- | | |
|----------------------------|-------------------------------|
| A. よく構成されていたかどうか | <u>は</u> <u>い</u> |
| B. 新しく役に立つ情報を折り込んであったかどうか。 | <u>は</u> <u>い</u> |
| C. 詳しすぎたかどうか | <u>い</u> <u>></u> <u>え</u> |

む す び

- | | |
|------------------|-------------------------------------|
| A. 重点を要約したか | <u>よ</u> <u>ろ</u> <u>し</u> <u>い</u> |
| B. 計画的に力強くしめくゝたか | <u>よ</u> <u>ろ</u> <u>し</u> <u>い</u> |

一般的なコメント

- | | |
|-----------|--|
| 1. ジェスチャー | <u>な</u> <u>し</u> |
| 2. 目くばり | <u>よ</u> <u>ろ</u> <u>し</u> <u>い</u> |
| 3. 熱意 | <u>興味深く熱意がこもっていた</u> |
| 4. 顔の表情 | <u>ほ</u> <u>></u> <u>え</u> <u>み</u> <u>が</u> <u>よ</u> <u>い</u> |
| 5. 姿勢 | <u>よ</u> <u>い</u> |
| 6. その他 | <ul style="list-style-type: none"> ・こんどは、もう少しゆっくり ・声が大きくて、はっきりしていた ・目の配り方はだいたいよかったが、もつとすみずみまで見るようにしたい |

Ⅶ おわりに

3ヶ月の授業参観中、特に印象に残ったことを数点あげたい。第1に、生徒が次々に手をあげて発言を求めていたこと。ただ積極的であるというばかりでなく、発言の内容が、観察力のするどさを物語っていたことである。発言者がなくて、教室が静まるということがなく、終始、生き生きとした雰囲気が教室に流れていたこと。

第2に、発表者は、仲間の批評を心よく受け、次のスピーチに役立てようとする態度がうかがわれたこと。

第3に、級友が発表している時に、隣り同志でおしゃべりをしたり、自分勝手なことをしている生徒が1人もいなかったことである。メモを取りながら、発表に聞き入る態度は、短期間に身につくものではなく、小学校、または、それ以前からの、話すこと聞くことの教育の成果ではないかと思われる。

第4に、宿題をさぼる者がなく、自分の出番を楽しみにしていたこと。とくにデモンストレーション・スピーチの前には、実演に使う材料を級友に見せ合ったりして、とても楽しそうであった。

第5に、1クラスの生徒の数が少ないのは、現在、私が教えている英語のジャンボクラスと比べて、とてもうらやましく感ずる。教師の目がよく1人1人に行き届き、教師の負担も比較的軽く、なかなか雰囲気の中で授業が進行していた。それにクラスの1部の生徒だけでなく、全員が前に出て発表する機会を多く持てることは、小クラスの大きな利点だと考える。最後に、教卓の前に立っても、恥かしそうな表情をせず、堂々とした態度で話したり、即興劇を演じていたのには感心した。この観察を通して、話すことの教育の重

要性をあらためて、認識させられた思いがした。

観察を申し込む中学校の選択および手続きの際にお世話いただいたオハイオ州立大学のベーツマン教授、私の希望を心良く受け入れて授業参観を許してくださったヘースティング中学校のルイス校長、ハンサー、ヘリック、タッカー諸先生に心からお礼を申し上げます。

(広島修道大学)